

結 語

小冊は、私なりに唐代詩文学研究の本来あるべき視座を模索して考察してきた軌跡である。無論、考察の対象はかなり偏ったものとなった。全唐詩を平均して概括したものではありません。しかしながら、そういったいわば「断層写真」のような考察が、皮膚の表面を撫でるばかりの「全体的考察」には得られない真実を見出すことがあると思う。

李白の「静夜思」という僅か五言絶句二十字の中の、そのまた二字の考察が、中国における唐詩受容の根本的問題と、ひいては清朝以来の日本人の唐詩研究の「歪み」、さらにその学をアプリオリなものとして継承してきたこれまでの中国学の盲点をいくつか指摘できたように思える。唐代の詩と真実を探るには、やはり具体的な問題をひとつひとつ再検討して、宋元以降の注釈などによる「成見」を排除し、唐の時代にその作品を返して、その言語感覚と感性の指し示すところを読み取るという作業を積み重ねる以外に方法は無いであろう。

振り返れば、昭和三十六年秋に名古屋大学文学部の専攻学科を定めるため中国文学科の教授入矢義高先生にお目にかかってお話を伺う機会があり、その学風とお人柄に惹かれて以来三十七年間、公私にわたって何かとお世話になり御指導を仰いできた。不肖の弟子にもかかわらず、小冊に納めた論文執筆に際しても幾多の示唆や叱正を頂いているだけでなく、書名『唐詩新攷』を頂いた。先生から頂いた「新」の一字は私にとって何ものにも代え難い名譽であるが、先生は本年六月三十日、白玉楼中の人となられた。痛恨の極みである。さらに、

昭和四十九年刊行の『入矢教授小川教授退休記念論集』に掲載すべく当時京都大學人文科學研究所教授であった荒井健先生に草稿を見て頂いたところ、私の「秦王」の唐太宗説に対して、即座に「李賀の内部においてはそうだったんでしょね」と肯われた。あの時の感動は、いまだに忘れたいものがある。以後の論文のいわば出発点を与えて下さった荒井先生の学恩を謝する次第である。最後になるが、この論集を纏める際、お世話になった同僚である尾崎實教授と萩野脩二教授に御礼申し上げる。

なお、図版2に掲げた李攀龍『唐詩選』萬曆閔氏刊本の書影は、復旦大學中文系陳允吉教授のお力添えにより同學圖書館特藏室の御好意で書影を掲載できたものである。陳允吉教授とは「秦王飲酒」に関して意見を異にするが、長年に亘る友情と学恩に対し衷心より御礼申し上げる。

題簽は岡村繁先生（九州大学名誉教授）より頂いた。

平成十年七月十七日

著者略歴

森瀬 壽三（もりせ としぞう）

1941年6月 愛知県生まれ

1964年3月 名古屋大学文学部卒業

1973年3月 名古屋大学大学院博士課程修了

現在 関西大学文学部中国語中国文学科教授（中国古典文学）

著書

『諸葛孔明の世界』（共著）新人物出版社 1983年

『中国文学歳時記』（共著）同朋社 1989年

論文

「李賀『秦王飲酒』をめぐって」（入矢教授小川教授退休記念論集）1974年

「李賀における道教的側面」（日本中国学会報第28冊）1976年

「李賀『秦王飲酒』再論」（関西大学文学論集第31巻3、4合併號）1982年

「李白『静夜思』をめぐって」（関西大学文学論集第38巻3、4合併號）1989年

「李白『静夜思』をめぐって（承前）」（関西大学文学論集第39巻3號）1990年

「On LiPo's "Ching yeh ssu"」（Orientalia Lovaniensia Periodica 22）1991年

「李攀龍『唐詩選』藍本考」（関西大学文学論集第43巻2號）1993年

「杜甫の立場」（関西大学中国文学会紀要第16號）1995年

「『先天應令』考」（関西大学文学論集第46巻3號集）1996年

訳注

「李義山七絶集釋稿（一）」（東方学報50冊）（共著）1978年

「李義山七律集釋稿（一）」（東方学報53冊）（共著）1981年

その他論文訳注等多数

唐詩新攷

平成10年10月22日 発行

著者 森 瀬 とし ぞう
もり せ とし ぞう

発行所 関西大学出版部
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

印刷所 株式会社 木原印刷
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-7-31

© 1998 Toshizo MORISE

Printed in Japan

ISBN 4-87354-266-9 C3098

落丁・乱丁はお取替えいたします。